

集団同一化と集団志向性が集団非行に及ぼす影響 一般群と非行群との比較

中川 知 宏*・仲 本 尚 史**・山入端津由***・大 淵 憲 一****

Effect of Group Identification and Group Orientation on Group Delinquent Behaviors among Delinquent and Non-delinquent Youth

Tomohiro NAKAGAWA*, Naoshi NAKAMOTO**, Tsuyoshi YAMANOHA***,
and Ken-ichi OHBUCHI****

Based on the group process model of delinquency, we hypothesized that non-delinquent youth who strongly identify group are motivated to enhance their social reputation and status. This, in turn, helps to inhibit delinquent behaviors. On the other hand, delinquent youth who have a strongly identify group are motivated to enhance their anti-social orientation; this promotes delinquent behavior. We administered a questionnaire to 104 male technical college students and 69 boys from a juvenile classification home in order to measure group variables and delinquency. Consistent with our hypothesis, we found that the boys who identified themselves with delinquent groups displayed an orientation toward an anti-social, intra-group status, which increased group delinquent acts. The students who identified themselves with non-delinquent groups displayed an orientation toward a pro-social, intra-group and inter-group status, which decreased group delinquent acts. An unexpected finding was that there were some college students who reported group delinquent acts. It was found that in their cases, group identification also prompted their orientation toward an anti-social status. In general, these results validate the model.

key words: group process, group delinquency, group identification, group orientation

問 題

1997年の神戸連続児童殺傷事件を機に少年法改正がなされ、少年犯罪は一層マスメディアの注目を受けるようになったが、マスメディアが取り上げる少年犯罪は単独犯によるものであることが多い。しかし、単独の少年犯罪は実際には少なく、現代の少年犯罪の主要な特徴は集団で犯罪に関与する点に

ある。

Howell, Krisberg, & Jones (1995) は児童・青年期の非行は二人かそれ以上の集団によって行われる傾向があることを示した。このような傾向は日本においても同様である。犯罪白書(2000)によると、少年院収容者の共犯率は年々増加しており、平成元年に58.8%であったものが、平成13年では69.3%まで上昇しており(法務省法務総合研究所, 2002),

* 東北福祉大学総合福祉学部
Faculty of Comprehensive Welfare, Tohoku
Fukushi University

** 福岡少年鑑別所
Fukuoka Juvenile Classification Home

*** いわき明星大学人文学部
Arts & Letters, Iwaki Meisei University

**** 東北大学文学研究科
Graduate School of Arts & Letters, Tohoku
University

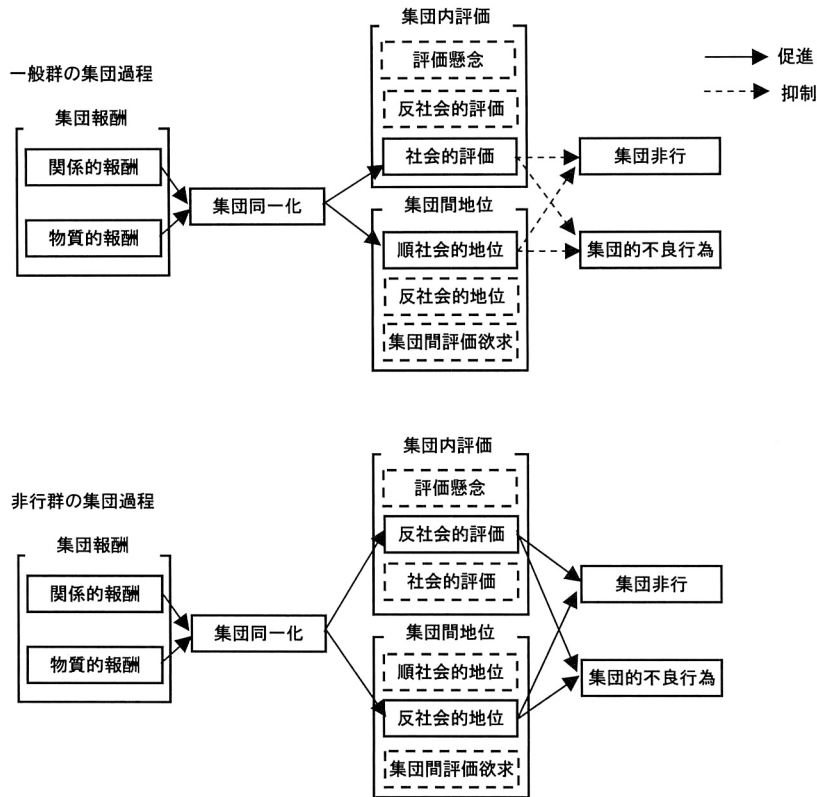


図1 集団過程モデル

収容者の約7割が集団非行に関与したことを示している。また、集団非行に関与した者は罪悪感が低いことも指摘されている(Deschenes & Esbensen, 1999; 家庭裁判所調査官研修所, 1999; 永井, 1999)。これは、多人数で非行に関与することで、責任の分散が生じ、自分が被害者にどれだけ危害を加えたかということが曖昧になるためであると考えられる。例えば、ある少年は、自分は被害者をあまり強く殴っていないので、中心になって暴力を振るっていた主犯格の少年が悪いと考えていたケースが報告されている(家庭裁判所調査官研修所, 1999)。このような理由で、少年たちは自分たちが犯罪に関与しているということを明確に自覚することなく集団非行に関与し、その罪悪感の低さがまた集団非行を促しているとも考えられる。こうした知見は、非行集団には個人の意思を超えて反社会的行為を促進するメカニズムがあることを示唆している。そこで、本研究では集団非行が生起する要因について検討する。

日本では集団非行に関する研究の蓄積は少ない

が、佐藤(1984)は実際に暴走族に加入し、少年たちとの相互作用を通じて、彼らが暴走する心理過程を詳細に記述している。また、鈴木・井口・高桑・小林・桶田・高橋(1994a, 1994b)は集団非行をテーマとした数少ない実証研究を行っているが、これらは実態調査のレベルにとどまっており、集団非行に関与するまでの心理過程を十分に検討しているとはいえない。一方、海外では集団と非行の関係を扱った研究は数多いが、その多くは社会学の分野で発展した理論であり、社会階層やサブカルチャーのようなマクロな視点からアプローチを試みたものであった(Cohen, 1955; Shaw & McKay, 1931)。近年では、Thornberry, Krohn, Lizotte, Smith, & Tobin (2003)がギャングメンバーシップと非行との関係を時系列的に検討している。彼らはギャング集団への「加入前」「加入中」「脱退後」の三つの位相を設け、各位相での非行頻度を比較した結果、少年がギャング集団に加入している期間はその期間よりも明らかに非行に関与する頻度が高くなっていることを見出した。このような関係はギャング集団のよう

な組織的な集団だけではなく、仲間集団のような非組織的な集団においても見出されている。数多くの研究は、逸脱的な仲間との付き合いが反社会的行動を予測する有力な要因であることを繰り返し示してきた (Capaldi, Crosby, & Stoolmiller, 1996; 日本弁護士連合会, 2002)。しかし、少年たちがどのような集団過程を経て非行に関与するようになるのかという点に関して、マイクロ・レベルでのアプローチは不十分だった。

一方、社会心理学的な集団理論としては、近年、社会的アイデンティティ理論 (Brewer, 2002; Brown, 2000; Tajfel, 1972) が注目され、研究の蓄積が進められてきた。そこで我々は、これに基づいて非行の集団過程モデルを独自に構築し、その検討を行うことを試みた。図1に示すように、このモデルは3段階から構成されるが、一般群と非行群では集団過程が異なると仮定している。第一段階は集団報酬で、集団に参加することが少年に対してどのような意味で魅力的かを表す段階である。集団過程モデルでは、集団所属が仲間からの心理的支持や援助などの関係的報酬と金銭のような経済的な報酬 (物質的報酬) をもたらし、このような報酬を得ることによって少年の集団に対する同一化が強まると仮定している。

集団過程モデルの第2および第3段階は社会的アイデンティティ理論に依拠したものである。仲間集団からの影響を理解するには、少年個人と仲間との関係の強さに注目する必要があるとされてきたが (Tremblay, Masse, Vitaro, & Dobkin, 1995)、第2段階の「集団同一化」ではこれを取り上げたものである。集団同一化は集団や集団成員に対するコミットメントと愛着からなる。前者は自集団への関与度や信頼などの認知的要素を、後者は自集団やその成員に対する愛着などの情緒的要素を表す。集団に対する同一化が強まると、成員にとっては個人的アイデンティティよりも集団の社会的アイデンティティが顕著になり、集団目標や集団規範に基づく集団志向的行動が増加するとされている (Doosje, Ellemers & Spears, 1999; Reicher, 1982; Reicher, 1984; Reicher, 2004)。

集団志向性は主に二つの動機からなる。一つは集団内評価への関心で、集団内の他の成員たちから尊敬や評価を得たいとする動機である (Agnew, 1991;

Hollin, 1992)。評価の内容や次元を検討した Carroll, Houghton, Hattie, & Durkin (1999) は、危険志向性が高い少年や非行少年は仲間から「乱暴」「向こう見ず」など反社会的な評価を求めるのに対して、一般高校生は「真面目」「勤勉」などの順社会的な次元で高い評価を求めることを見いだした。これらの研究は、非行少年が集団内で仲間からの評価に強い関心を持っていること (評価懸念)、特に、反社会的評価を受けることに対する欲求が強いことを示す一方で、一般の少年は集団内で社会的な評価を得ようとする傾向があることを示している。このような特徴は所属集団に同一化した少年において特に強いと考えられる。これらの先行研究から、本研究では、集団過程モデルとして集団内評価を反社会的評価、社会的評価、評価懸念の三つに注目した。

集団志向性のもう一つの動機は集団自体の価値や地位を高めたいという欲求であり、我々はこれを集団間地位と定義した。Emler & Reicher (1995) は、一般の少年が勉学やスポーツなど社会的に望ましい次元に関して自集団の優位性を示すために他集団と競うように、非行少年たちはしばしば自集団の優位性を示すために他の非行集団とタフさを競い合うと述べた。また、Curry & Decker (2003) は、少年のギャング集団が他の集団から脅威を受けると集団凝集性が強まり、その結果、しばしば暴力的衝突が発生することを見出した。これらの研究結果は、非行少年たちが自集団の地位に関心を持っていること (集団間評価欲求)、特に、反社会的地位への関心が強いことを示しているが、一般の少年の場合は順社会的地位に関心を示すと考えられることができる。

本研究の目的は、集団過程モデルの中でも、特に集団の属性によって効果が異なると予測される第二段階の集団同一化と第三段階の集団志向性が集団非行と集団的不良行為に及ぼす効果を検討することである。我々は、集団同一化がどの次元の集団内評価や集団間地位に対する関心を促進するかは、少年が所属する集団の属性に依存すると仮定し、非行集団に所属する少年は集団へのコミットが高まると反社会的な評価や地位を求め、これが集団非行を促進するが、一般の少年は、集団へのコミットが高まると社会的な地位や評価を求め、これが集団非行を抑制すると予測した。

表 1 集団タイプと非行

	窃盗	暴走 行為	薬物	不法 侵入	傷害	恐喝	詐欺	無免許 運転	その他	合 計
暴 走 族	13	3	2	2				1	1	24
遊び仲間	24	6	4	7	8	4				53
ギャング		1	1				1			3
そ の 他	4			1	1					6
合 計	41	10	7	10	9	6	1	1	1	86

方 法

調査回答者

非行研究において、一般群と非行群を明確に弁別することは困難である。その理由として、青年期にあたる少年の多くは多かれ少なかれ違法性のある行為に関与すると考えられるからである（鈴木ら、1996）。しかし、少年鑑別所に入所している少年は繰り返し非行に関与したり、傷害事件のような重大な非行に関与した者であり、普通に高校生活を送っている少年とは区別されるであろう。したがって、本研究では一般群は高校生活を送っていた少年と定義し、非行群は少年鑑別所に入所している少年と定義する。非行群については、F 少年鑑別所に入所中の少年のうち、本件非行において集団非行に関与した者 77 名（すべて男性）に対して同施設の法務技官が質問紙を配布し、各自で回答させた後、回収した。なお、回答の歪曲を避けるためにフェイスシートで、この調査と審判の結果は関係がないことを明記した。回答に不備のある者を除く 69 名のデータを分析した。平均年齢は 16.9 歳 ($SD=1.5$) である。本件非行の内訳は窃盗 47 人、不法侵入 11 人、暴走行為 10 人、傷害・薬物 9 人、恐喝 7 人、その他・無免許運転 4 人、詐欺 1 人で、回答者の大半が窃盗に関与していた¹⁾。はじめに回答者に本件非行を記述させたあと、「あなたが今回の非行に関わった時のグループは次のどれに当てはまりますか。最も近いものを一つ選んで、その数字に○をつけて下さい」とたずねた。選択肢は Nakagawa, Kikuchi, & Ohbuchi (2004) の知見に基づき四つの（暴走族、遊び仲間、ギャングチーム、その他）の中から一つを

選ばせた。選択数は順に、17 名、42 名、2 名、5 名で、今回の回答者の大半 (60.8%) が遊び仲間と非行に関与したことが分かる。また、集団のタイプと本件非行の関係を表 1 に示す。

一般群として、本研究では高校生の集団に焦点を当てた。集団非行が最も多く見られるのは 16~18 歳であり、高校生の年代がこれにあたるからである。ただし、調査回答者は高校生ではなく高校を卒業して数年以内の専門学校生とし、高校時代の交友関係を想起させて回答を求める回想法を用いた。調査回答者は仙台市内の専門学校生 140 名のうち、年齢が 20 歳以上の回答者を分析から除外した計 104 名（すべて男性）である。除外した理由は、前者は高校を卒業して 2 年以上経過しており、高校時代を正確に回想できない可能性があると判断したためである。回想法は過去の経験を想起しながら、質問項目に回答する方法であり、非行のようなネガティブな内容を尋ねる際には、関与した時点から時間が経過しているため、高校生に直接たずねるよりも回答による不利益や懸念が生じないと考えられる。したがって、回想法は社会的望ましさの影響を排除できる有益な方法とみなされており、他の非行研究でも使用されている（吉澤・吉田、2003）。平均年齢は、18.4 歳 ($SD=0.50$) である。はじめに回答者に「あなたが高校時代、最も多く行動を共にした 3 人以上のグループを一つだけ選択してください」とたずね、四つの選択肢（学内の友人グループ、部活またはサークルの仲間、学外の友人グループ、その他）から一つを選ばせた。選択数は、順に、58 名、31 名、13 名、1 名で、一般群の大半の回答者が学内の友人と行動を共にしていたことがわかる。

手続き

非行群、一般群ともに所属集団を記入した後、集団構造について人数、役割、集団名、集団規範の有

1) 本件非行の総数と調査回答数が一致しないのは、複数の非行に関与していた者がいたためである。

無を選択回答でたずね、役割、集団名、集団規範の具体的な内容については自由記述で回答を求めた。続いて、集団過程モデルを構成する諸変数を測定する項目に回答を求めた(付録参照)。まず、集団同一化では、回答者がその所属集団にどの程度、愛着を持っていたのかをたずねた。Karasawa(1991)は集団同一化を測定する12項目の尺度を作っているが、本研究では、一般の仲間集団のほかに非行集団も対象としており、これらに適用可能なもの5項目を選んで、本研究で用いた。この際、項目表現も易しいものに変更した。

集団志向性のうち、集団内評価については、回答者が集団成員からどのような評価を得たかたとたずね、社会的評価(4項目)、反社会的評価(4項目)、評価懸念(3項目)の3尺度について回答させた。社会的評価とは、集団成員から社会規範を順守したり、学業に励むといった社会的な次元での評価を得たいと思ったかどうかをたずねたものである。一方、反社会的評価では、集団成員から自分が関与した違法行為や自分の腕力の強さを示すことで反社会的な評価を得たいと思ったかどうかをたずねた。また、評価懸念については、自分自身が集団成員からどのように見られているかについて不安を感じていたかどうかをたずねた。

集団間地位については、回答者が他者から所属集団についてどのような評価を得たかたとたずね、順社会的地位(3項目)、反社会的地位(4項目)、集団間評価欲求(3項目)の3尺度について回答させた。順社会的地位とは、他者から所属集団が社会規範を守ったり、礼儀正しい集団であるというような社会的な次元での地位を獲得したいと思ったかどうかをたずねたものである。一方、反社会的地位では、所属集団が乱暴な集団であるとか、反抗的な集団であると反社会的な次元での地位を獲得したいと思ったかどうかをたずねた。また、集団間評価欲求については、他者に所属集団を積極的に誇示しようと思ったかどうかをたずねた。これらの項目について「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の順に5段階尺度で評定させ、1点から5点を与え得点化した。

集団非行の測度は非行と不良行為の2下位尺度からなり、前者は法律に抵触する行為の経験をたずねる6項目、後者は、喫煙や飲酒など成人であれば

合法的だが、未成年であるがゆえに問題視される行為をたずねる6項目である。この測定では、回答者には、仲間とともにそのような非行や不良行為に関与したことがあるかどうかについてたずね、各項目を「全くない」から「6回以上」の順に7段階尺度で評定させ、1点から7点を与え得点化した。なお、分析にあたってSPSS11.0を用いた。

結 果

集団構造

まず、回答者に所属集団の人数を「3人」(1)から「10人以上」(8)の選択肢を用いてたずねた(表2)。選択数の高い順に並べると、非行群は、10人以上(19名)が最も多く、次いで3人(16名)、4人(9名)、5人(7名)、6人・8人(5名)、9人(4名)、7人(3名)だった。一般群では、5人(26名)という回答が最も多く、次いで4人(21名)、10人以上(16名)、6人(14名)、3人(11名)、7人(9名)、8人・9人(3名)であった。

次に、役割分担・集団名・集団規範について χ^2 検定を行った(表3)。その結果、非行群では、役割分担が「あった」と回答した者は10名(14.7%)にすぎず、その内容は暴走族特有の総長、副総長、特攻隊長といったものであった。一般群で、役割分担が

表2 所属集団の成員数

	非行群	一般群
3人	23.5% (16)	10.7% (11)
4人	13.2% (9)	20.4% (21)
5人	10.3% (7)	25.2% (26)
6人	7.4% (5)	13.6% (14)
7人	4.4% (3)	8.7% (9)
8人	7.4% (5)	2.9% (3)
9人	5.9% (4)	2.9% (3)
10人以上	27.9% (19)	15.5% (16)

表3 非行群と一般群の集団構造

		非行群	一般群
役割分担	あり	14.7% (10)	15.4% (16)
	なし	85.3% (58)	84.6% (88)
集 団 名	あり	30.9% (21)	10.7% (11)
	なし	69.1% (47)	89.3% (92)
集団規範	あり	27.5% (19)	12.6% (13)
	なし	72.5% (50)	87.4% (90)

「あった」と回答した者も 16 名 (15.4%) だけだった。その内容は、主将やまとめ役のような役割が多かった。集団名が「あった」と回答した者は、非行群では 21 名 (30.9%)、一般群では 11 名 (10.7%) であり、両群には有意な差が見られた ($\chi^2(1)=10.99$, $p<.01$)。集団規範が「あった」と回答したものは非行群 (19 名, 27.5%) が一般群 (13 名, 12.6%) よりも有意に多かったが ($\chi^2(1)=6.07$, $p<.05$)、いずれも少数だった。規範内容は非行群では「薬物の使用禁止」が多く、一般群では「時間を守る」や「隠しごとをしない」などだった。

全体的に、非行少年が所属する集団の集団規模は 3~5 人程度の小規模な集団と 10 人以上の大規模な集団が多いが、一般少年は 3~5 人程度の小規模な集団が多かった。役割・集団名・集団規範の点から、非行少年と同様に、一般少年の所属集団も非組織的な集団が多いことが分かる。

尺度の分析

集団過程モデルの変数を測定する各尺度について

表 4 尺度平均値と標準偏差

調査項目	Mean (SD)	
	非行群	一般群
集団同一化	3.34 (1.07)	3.86 (0.89)
集団内評価		
社会的評価	2.15 (0.85)	2.49 (0.84)
反社会的評価	1.93 (0.86)	1.77 (0.74)
評価懸念	2.31 (0.80)	2.40 (0.99)
集団間地位		
順社会的地位	2.28 (0.97)	1.98 (1.00)
反社会的地位	1.95 (0.88)	1.57 (0.73)
集団間評価欲求	2.43 (0.99)	2.03 (1.04)
集団非行	2.58 (1.62)	1.43 (0.87)
集団的不良行為	4.79 (1.60)	3.37 (1.83)

Cronbach の α 係数を群ごとに算出したところ、集団同一化 (非行群: $\alpha=.86$, 一般群: $\alpha=.83$)、反社会的評価 (非行群: $\alpha=.82$, 一般群: $\alpha=.76$)、社会的評価 (非行群: $\alpha=.71$, 一般群: $\alpha=.60$)、評価懸念 (非行群: $\alpha=.46$, 一般群: $\alpha=.76$)、反社会的地位 (非行群: $\alpha=.72$, 一般群: $\alpha=.77$)、順社会的地位 (非行群: $\alpha=.75$, 一般群: $\alpha=.86$)、集団評価欲求 (非行群: $\alpha=.76$, 一般群: $\alpha=.80$) という結果であった。評価懸念の α 係数がやや低いものの、全体的にはほぼ許容水準の信頼性が得られた。なお、各尺度平均値と標準偏差を表 4 に示した。

次に、非行群と一般群で各尺度に差があるかどうかを検討するため、分散分析を行った。集団同一化の尺度平均値は一般群 (3.86) の方が非行群 (3.35) よりも有意に高かった ($F(1,172)=11.63$, $p<.01$)。尺度の midpoint が 3 なので、集団同一化は両群とも高く、どちらの群の少年たちも自集団に対して愛着やコミットを持っていたことを示しているが、相対的には一般群のそれは強かった。集団内評価の下位尺度である社会的評価の平均値は一般群 (2.49) の方が非行群 (2.15) よりも有意に高かった ($F(1, 172)=6.73$, $p<.01$)。両群とも midpoint より低い平均値であるため、社会的評価を求める傾向は低かったが、相対的に一般の少年は非行少年よりも、集団成員から真面目だとか順法的であるといった社会的な評価を得たいと思う傾向が高かった。一方、反社会的評価と評価懸念については非行少年と一般少年の間では有意差が見られず、両尺度の平均値は midpoint よりも低かった。集団間地位の下位尺度である反社会的地位と集団評価欲求の平均値は非行群 (1.95; 2.43) の方が一般群 (1.57; 2.03) よりも有意に高かった (F

表 5 変数間の相関 (一般群)

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 集団同一化								
2. 反社会的評価	.20*							
3. 社会的評価	.21*	.40**						
4. 評価懸念	.08	.41**	.24*					
5. 反社会的地位	.21*	.72**	.38**	.35**				
6. 順社会的地位	.23*	.37**	.53**	.26**	.60**			
7. 集団間評価欲求	.31**	.53**	.49**	.41**	.70**	.64**		
8. 集団非行	.10	.37**	.10	.15	.35**	.02	.21*	
9. 集団的不良行為	.29**	.30**	-.01	.00	.25**	-.12	.16	.53**

* $p<.10$, ** $p<.05$, *** $p<.01$

表 6 変数間の相関 (非行群)

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 集団同一化								
2. 反社会的評価	.31**							
3. 社会的評価	.14	.47**						
4. 評価懸念	.28*	.54**	.51**					
5. 反社会的地位	.24†	.75**	.41**	.58**				
6. 順社会的地位	.08	.19	.65**	.44**	.36**			
7. 集団間評価欲求	.39**	.50**	.47**	.60**	.55**	.51**		
8. 集団非行	.08	.37**	-.01	.22†	.26*	-.07	.12	
9. 集団的不良行為	.30*	.34**	.03	.25*	.18	-.06	.18	.64**

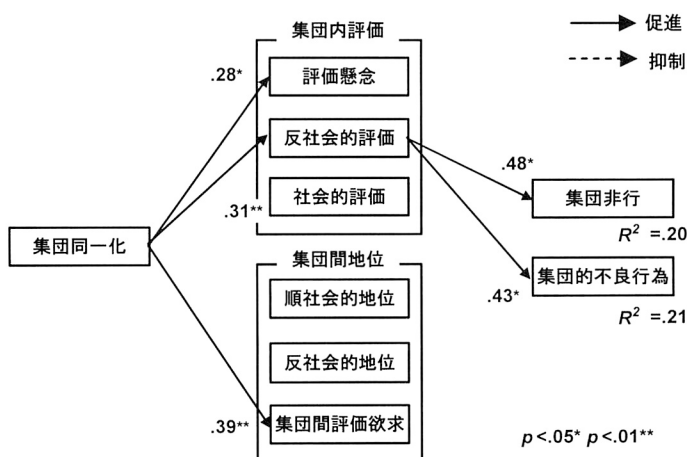
† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$ 

図 2 非行群の集団過程

(1,172)=6.73, $p < .01$; $F(1,172)=6.49$, $p < .05$)。平均値は両群ともに中点より低かったため、反社会的な次元での集団間地位や集団評価欲求を求める傾向は低いが、相対的に非行少年は一般の少年よりも所属集団を乱暴であるとか、法を破るなど、反社会的地位を誇示しようとしたり、所属集団を他者にアピールするといった傾向が高かった。しかしながら、順社会的地位については有意差が見られなかった。また、集団非行と集団的不良行為の関与度については、非行少年(2.58; 4.79)は一般の少年(1.43; 3.37)よりも有意に高かった($F(1,172)=36.79$, $p < .01$; $F(1,172)=27.81$, $p < .01$)。

集団過程モデルの検討

集団過程モデルを、群別にパス解析によって検討した。はじめに、集団内評価の下位尺度である反社会的評価、社会的評価、評価懸念、そして、集団間地位の下位尺度である反社会的地位、順社会的地位、集団内評価欲求をそれぞれ従属変数にし、集団

同一化を独立変数とする回帰分析を行った。次に、集団非行と集団的不良行為のそれぞれを従属変数とし、集団同一化と集団志向性の全変数を独立変数とする重回帰分析を行った。表 5, 6 は各群の全変数間の相関で、また、有意な β を用いてパス図を作成した (図 2, 図 3)。

まず、最初に、集団同一化と集団志向性についての関係を見ると、非行群では、集団同一化が反社会的評価、評価懸念、集団評価欲求を有意に強めた。集団志向性と集団非行、集団的不良行為の関係を見ると、反社会的評価のみが集団非行、集団的不良行為の双方を有意に強めた。一方、一般群については、集団同一化が反社会的評価、社会的評価、反社会的地位、順社会的地位、集団評価欲求を強め、これらのうち、反社会的地位は集団非行を促進し、逆に、順社会的地位はこれを抑制した。また、集団的不良行為については、集団同一化がこれを促進し、順社会的地位はこれを抑制した。この結果は、我々の予

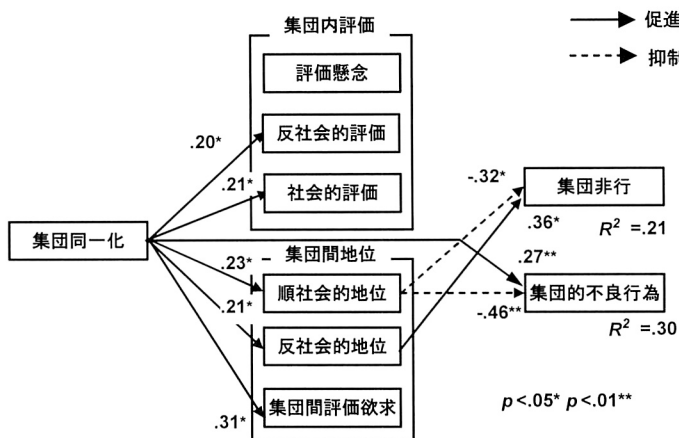


図 3 一般群の集団過程

表 7 集団同一化と集団志向性の相関（反規範的集団群）

	1	2	3	4	5	6
1. 集団同一化						
2. 反社会的評価	.21*					
3. 社会的評価	.13	.47**				
4. 評価懸念	.00	.41**	.19			
5. 反社会的地位	.22*	.71**	.40**	.39**		
6. 順社会的地位	.25*	.38**	.54**	.32**	.59**	
7. 集団間評価欲求	.30**	.52**	.46**	.41**	.70**	.66**

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表 8 集団同一化と集団志向性の相関（規範的集団群）

	1	2	3	4	5	6
1. 集団同一化						
2. 反社会的評価	-.11					
3. 社会的評価	.50†	-.02				
4. 評価懸念	.37	-.11	.45†			
5. 反社会的地位	.04	.90**	.27	-.09		
6. 順社会的地位	.21	.62*	.51†	.15	.76**	
7. 集団間評価欲求	.26	.47†	.67*	.24	.69**	.76**

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

測とおおむね一致しているが、不一致な点も見られた。それは、一般群においても、集団へのコミットが社会的な次元だけではなく、反社会的な次元に関する集団地位への関心を高め、これが集団非行を促進させたことである。

この結果は、一般の少年が所属する集団が全く反社会的傾向を持たないわけではなく、そうした性質を持つ集団も含まれていることを示唆している。そこで、我々は一般群の集団を非行性に基づいてさらに2群に分けた。集団非行または集団的不良行為に

一度でも関与したことがあると答えた回答者が所属した集団を反規範的集団群 ($N=89$)、一度も関与したことがないと答えた回答者が所属した集団を規範的集団群 ($N=15$) とした。後者の N が小さいために高度な分析は不可能だったので、集団同一化と集団志向性の相関係数を群毎に算出した（表7、表8）。その結果、反規範的集団群では、集団同一化と反社会的評価、反社会的地位、順社会的地位、集団評価欲求と有意な相関を示したが、規範的集団群では、集団同一化は社会的評価とのみ有意傾向の相関

を示した。このことは、反社会的地位への関心は一般群においても反規範性を持つ集団に強く同一化する少年にのみ見られ、反規範性が低い一般群の集団に強く同一化する少年は社会的評価を求めていることを示しており、集団の属性によって、集団同一化がどの次元に関して集団内評価や集団間地位に関心が強まるか異なることを示唆している。

考 察

本研究では、非行どのような集団過程を経て集団非行や集団的不良行為に關与するのかを集団同一化、集団内評価（反社会的評価、社会的評価、評価懸念）、集団間地位（反社会的地位、順社会的地位、集団評価欲求）の観点から検討した。

非行群については、我々が予測したように集団に強くコミットした少年は内集団成員から反社会的評価を得ようとして、集団非行や集団的不良行為に關与するという結果が示された。こうした結果は、社会的アイデンティティ理論の仮定を支持するものである。少年は集団にコミットすることで社会的アイデンティティが活性化され、彼らが自己を所属集団の一員として強く認知し、集団の目標や価値観に合致した集団内評価や集団間地位を求めることを示している。非行少年は集団内評価の中でも特に反社会的評価を求めるが、それは、非行少年の場合、集団目標が反社会的なものであることが多く、これに合致した評価を得ることが集団成員からの信頼を得る手段になるからで、それゆえ、彼らは反社会的評価を求め集団非行や集団的不良行為に關与したのである。

一方、我々の予測と異なる結果も見られた。集団同一化が自集団の反社会的地位への関心を強め、これを介して非行を促進するという仮説は支持されなかった。非行少年が所属する集団は、69名中42名が遊び仲間だった。暴走族のような組織的集団は他集団よりも優位に立つというような集団目標を持っていることが多いが、遊び仲間のような集団はそうした集団目標を持たない非組織的集団である。それゆえ、少年は集団へのコミットが高くとも、集団間地位への関心が高まることはなく、これを求めて集団非行に關与することはなかったのではないかと考えることができる。こうした結果から、非行群についての集団過程モデルは部分的に支持されたといえ

よう。

一般群は、我々の予測と一致して、集団同一化が順社会的地位を媒介して、集団非行と集団的不良行為を抑制した。この結果は、非行群と同様、一般群の集団についても社会的アイデンティティ理論に基づく我々のモデルが適用可能であることを示している。一方、予測と異なり、一般の少年も反社会的地位を求め集団非行に關与することがあることが示された。一般の少年は非行少年と比べると相対的に反社会的な次元での集団間地位を求める傾向は低いが、そうした次元への関心が全くないわけでない。自集団の反社会性を他者に示すことは一見、拒絶や排除などの不利益を被る可能性があるように見えるが、ある程度の反社会性を示す場合、クラスメートのような他者から人気を得る場合もある (Bierman, Smoot, David, & Aumiller, 1991; Pakaslahti & Keltikangas-Jarvinen, 1996)。それゆえ、他者から自集団の反社会的地位を獲得するため集団非行に關与するのではないかと考えられる。

同様に、集団内評価においても集団同一化が反社会的評価を促進した。青年期の少年は大人や教師などの権威に対して反抗的になる時期であり、青年期の少年が集団を形成すると多少なりとも反社会的な特性を持つようになることが、その一因になっているのではないと思われる。しかし、これが集団非行や集団的不良行為を促進することはなかった。

さらに、集団同一化は集団志向性を媒介せず、直接集団的不良行為に影響していた。上述したように、青年期の集団は反社会的な特性を少なからず持っており、実際、高校時代において、何らかの不良行為に關与したことがある少年は非常に多い (鈴木・鈴木・原田・井口, 1996)。また、こうした行為の多くは集団で行われる (Warr, 2002)。それゆえ、青年期集団の場合、これにコミットが高い少年は集団的不良行為に關与する傾向が生ずるのではないかと考えられる。こうした結果から、一般群についても集団過程モデルの理論的仮定が部分的に支持されたといえよう。

非行群と一般群の相違点について、集団過程モデルでは、一般少年は集団同一化が高まると社会的評価や順社会的地位を媒介して集団非行や集団的不良行為を抑制するが、非行少年は反社会的評価や反社会的地位を媒介して集団非行や集団的不良行為を促

進すると仮定した。しかし、こうした理論的仮定とは異なる相違点も見出された。それは、非行少年は集団同一化が高まると評価懸念が高まるが、一般少年はそうではないという点である。非行少年は拒絶経験が多く (Dodge, 1989; 日本弁護士連合会, 2002)、自分を受容してくれる集団成員との関係を重視するが、彼らは仲間内での葛藤経験が多く集団成員と円滑な関係を築くことが困難である (Dishion, Andrews, & Crosby, 1995)。しかし、集団成員との関係を維持する上で、彼らから評価を獲得することは重要であるため、非行少年は集団へのコミットが高まると、現在の所属集団から排除されたくないという心理状態が生じ、集団成員が自分をどのように評価しているのか不安になるのだろうと考えられる。

集団過程モデルの結果から集団非行の抑止策として、非行集団への愛着を絶つことが有効であることを示唆している。集団非行の抑止を行ううえで、非行集団に未加入の少年を対象とした予防策とすでに加入している少年を対象とした事後策の双方を考慮する必要がある。前者を目的とした抑止策として、GREAT (Gang Resistance Education and Training: ギャング抵抗教育訓練) と呼ばれる教育プログラムがあり、これはギャングへの加入や非行を予防することを目的としている。このプログラムの効果は Esbensen, Osgood, Taylor, Peterson, & Freng (2001) によって評価されており、長期的には改善効果が薄い、短期的にはその効果が見られている。その一方で、すでに非行集団に加入した少年をいかにして非行集団から離脱させるかという更生プログラムはほとんど存在せず、非行集団への同一化を規定する要因を検討する必要があるだろう。

本研究の結果を要約すると、非行少年は集団同一化が反社会的次元の集団内評価と集団間地位を促進し、反社会的評価が集団非行や集団的不良行為を促進する結果となった。一方、一般の少年については集団同一化が社会的な集団内評価や集団間地位を促進すると同時に、反社会的な集団内評価や集団間地位も促進し、集団非行と集団的不良行為について促進過程と抑制過程の双方が見られた。このような結果が生じた背景には、一般の少年が所属する集団にも相対的に反規範性の高い集団とそうでない集団が混在していることに起因するものであると考え、追

加的に相関分析を行った結果、集団非行や集団的不良行為に関与したことがあるような、比較的反規範性の高い集団に所属する一般の少年は、集団同一化が反社会的次元での集団内評価と集団間地位を促進し、社会的な集団に所属する少年は、集団同一化は社会的次元での集団内評価を促進した。これは集団の反規範性に依存して、集団同一化が異なる評価次元を促進することを示唆するものである。しかしながら、本研究では、集団の反社会性を測定する適切な指標が欠けていたため、この点については曖昧なままであった。今後の調査では、集団の反規範性に関する指標を導入し、反規範性の高い集団と低い集団を弁別したうえで、集団過程を検討する必要がある。

引用文献

- Agnew, R. 1991 The interactive effects of peer variables on delinquency. *Criminology*, 29, 47-72.
- Bierman, K. L., Smoot, D. L., & Aumiller, K. 1993 Characteristics of aggressive-rejected, aggressive (nonrejected), and rejected (nonaggressive) boys. *Child Development*, 64, 139-151.
- Brewer, M. B. 2002 *Intergroup relations* (2nd ed.). Philadelphia: Open University Press.
- Brown, R. 2000 Social identity theory: Past achievements, current problems and future challenges. *European Journal of Social Psychology*, 30, 745-778.
- Carroll, A., Houghton, S., Hattie, J., & Durkin, K. 1999 Adolescent reputation enhancement: Differentiating delinquent, nondelinquent, and at-risk youths. *Journal of Child Psychology & Psychiatry*, 40, 593-606.
- Capaldi, D., Crosby, L., & Stoolmiller, M. 1996 Predicting the time of first sexual intercourse for adolescent males. *Child Development*, 67, 344-359.
- Cohen, A. K. 1955 *Delinquent Boys: The Culture of the Gang*. IL, UA: Free Press.
- Curry, G. D., & Decker, S. H. 2003 *Confronting Gangs: Crime and Community* (2nd ed.). CA, US: Roxbury Publishing Company.
- Deptula, D. P., & Cohen, R. 2004 Aggressive, rejected, and delinquent children and adolescents: a comparison of their friendships. *Aggression and Violent Behavior*, 9, 75-104.
- Deschenes, E. P., & Esbensen, F. 1999 Violence and

- gangs: Gender differences in perceptions and behavior. *Journal of Quantitative Criminology*, **15**, 63-96.
- Dishion, T. J., Andrews, D. W., & Crosby, L. 1995. Antisocial boys and their friends in early adolescence: Relationship characteristics, quality, and interactional process. *Child Development*, **66**, 139-151.
- Dodge, A. K. 1989 Problems in social relationships. In E. J. Mash & R. A. Barkley (Eds.), *Treatment of Childhood Disorders*. pp. 222-244. New York: Guilford Press.
- Doosje, B., Ellemers, N., & Spears, R. 1999 Commitment and intergroup behavior. In N. Ellemers., R. Spears., & B. Doojse (Eds.), *Social Identity: Context, Commitment, Content*. pp.84-106. Oxford, England: Blackwell Science.
- Emler, N., & Reicher, S. 1995 *Adolescence and Delinquency: The Collective Management of Reputation*. MA, US: Blackwell.
- Espelage, D. L., Holt, M. K., & Henkel, R. R. 2003 Examination of peer-group contextual effects on aggression during early adolescence. *Child Development*, **74**, 205-220.
- Hollin, C. 1992 *Criminal behaviour: A psychological approach to explanation and prevention*. London: Falmer Press.
- Howell, J. C, Krisberg, B., & Jones, M. 1995 Trends in juvenile crime and youth violence. In J. C. Howell, B.K. Krisberg, J. D. Hawkins, & J. J. Wilson (Eds.), *Serious, Violent, and Chronic Juvenile Offenders*. pp. 1-35. CA, US: Sage Publication.
- 法務省法務総合研究所 2000 平成 12 年度版犯罪白書, 財務省印刷局.
- 法務省法務総合研究所 2002 平成 14 年度版犯罪白書, 財務省印刷局.
- Karasawa, M. 1991 Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 293-307.
- 家庭裁判所調査官研修所 2001 重大少年事件の実証的研究, 司法協会.
- 永井君子 1999 少年鑑別所から見た現代の非行少年, 法律のひろば.
- Nakagawa, T., Kikuchi, T., & Ohbuchi, K. 2004 Influence of group process in juvenile delinquency: An interview study with inmates of a reformatory home. *Tohoku Psychologica Folia*. **63**, 61-72.
- 日本弁護士連合会 2002 検証 少年犯罪—子ども・親・付添人弁護士に対する実態調査から浮かび上がるもの, 日本評論社.
- Pakaslahti, L., & Keltikangas-Jarvinen, L. 1996 Social acceptance and the relationship between aggressive problem-solving strategies and aggressive behaviour in 14-year-old adolescents. *European Journal of Personality*, **10**, 249-261.
- Reicher, S. D. 1982 The determination of collective behaviour. In H. Tajfel (Ed.), *Social Identity and Intergroup Relations*. pp. 41-83. US: Cambridge University Press.
- Reicher, S. D. 1984 The St Paul' s riot: an explanation of the limits of crowd action in terms of social identity model. *European Journal of Social Psychology*, **14**, 1-21.
- Reicher, S. D. 1987 Crowd behaviour as social action. In J. C. Turner, M. A. Hogg, P. J. Oakes, S. D. Reicher, & M. Wetherell, *Rediscovering the Social Group: A Self-Categorization Theory*. Oxford and New York: Blackwell. (ターナー, J. C. 蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳) (1995). 社会集団の再発見—自己カテゴリー化理論 誠信書房 pp. 226-270)
- 佐藤郁哉 1984 暴走族のエスノグラフィー モードの叛乱と文化の呪縛, 新曜社.
- Shaw, C. R., & McKay, H. D. 1931 *Juvenile Delinquency and Urban Areas*. US: University of Chicago Press 鈴木護・鈴木慎吾・原田豊・井口由美子 1996 自己申告法による中学・高校生の逸脱行動の広がりとその背景要因に関する研究. 科学警察研究所報告防犯少年編, **37**, 28-39.
- 鈴木真悟・井口由美子・高桑和美・小林寿一・桶田清順・高橋良彰 1994a 少年の共犯形態による非行に関する研究. 1. 非行タイプおよび集団サイズによる集団特性の分析. 科学警察研究所報告防犯少年編, **35**, 1-12.
- 鈴木真悟・井口由美子・高桑和美・小林寿一・桶田清順・高橋良彰 1994b 少年の共犯形態による非行に関する研究. 2. 非行タイプおよび集団サイズによる犯行過程の特徴. 科学警察研究所報告防犯少年編, **35**, 13-27.
- Thornberry, T. P., Krohn, M. D., Lizotte, A. J., Smith C. A., & Tobin, K. 2003 *Gangs and Delinquency in Developmental Perspective*. US: Cambridge University Press.
- Tremblay, R. E., Masse, R. C., Vitaro, F., & Dobkin, P. L. 1995 The impact of friends' deviant behavior on early onset of delinquency: Longitudinal data from 6 to 13 years of age. *Development & Psychopathology*, **7**, 649-667.

Warr 2002 *Companions in Crime*. US: Cambridge University Press.

を中心として－. 犯罪心理学研究, 41, 37-52.

吉澤寛之・吉田俊和 2003 社会的ルールの知識構造と社会的逸脱行為傾向との関連－知識構造の測定法

(受付: 2006. 7. 26, 受理: 2007. 2. 13)

付録 調査で使った項目

調査項目

集団同一化

どんな時でもグループのメンバーだけは信頼できた。
グループのメンバーにとっても親しみを感じていた。
自分のグループがとても好きだった。
グループの一員であるという気持ちは強い方だった。
自分はグループのメンバーだと実感することがあった。

集団内評価－社会的評価

グループのメンバーからまじめな人だと思われたかった。
試験で良い成績をとったらグループのメンバーに自慢したいと思った。
クラブなどの試合で成績が上位に入ったらグループのメンバーに自慢したいと思った。
グループのメンバーから社会の規則や決まりをきちんと守る人だと思われたかった。

集団内評価－反社会的評価

グループのメンバーからワルだと思われたかった。
ケンカで相手を叩きのめしたらグループのメンバーに自慢できると思った。
何かしら法律を破るようなことをしたらグループのメンバーに自慢できると思った。
グループのメンバーから悪知恵が働くやつだと思われたかった。

集団内評価－評価懸念

グループのメンバーからどのように思われているかとても不安だった。
グループの雰囲気盛りを下げていないか不安になることがあった。
グループから自分だけ浮いているのではないかと気になることがあった。

集団間地位－順社会的地位

人から優秀なグループだと思われたかった。
人から法を守るようなグループだと思われたかった。
人から礼儀正しいグループだと思われたかった。

集団間地位－反社会的地位

人から乱暴なグループだと思われたかった。
人から大人を出し抜くようなグループだと思われたかった。
人から法を破るようなグループだと思われたかった。
人から教師に反抗的なグループだと思われたかった。

集団間地位－集団間評価欲求

人から自分のグループのことがどのように思われているのか気になった。
自分のグループを人から一目置かれるような存在にしたかった。
自分のグループの存在を人にアピールしたかった。

非行

グループの仲間と薬物を吸ったり、打ったりしたことがある。
グループの仲間と学校や街中にある物を壊したり傷つけたりしたことがある。
グループの仲間と万引きをしたことがある。
グループの仲間と一緒に誰かと殴り合いのケンカをしたことがある。
グループの仲間と看板や建物などに落書きをしたことがある。
グループの仲間と一緒に誰かを脅して金品をとったことがある。

不良行為

グループの仲間と教師に反抗したことがある。
グループの仲間と深夜まで街中をうろついていたことがある。
グループの仲間と学校をサボったことがある。
グループの仲間とタバコを吸ったことがある。
グループの仲間と酒を飲んだことがある。
グループの仲間とギャンブルをやったことがある。